The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『易学啓蒙』試論 : 明著策を中心に
Author(s)	辛, 賢
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2023, 63, p. 61-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91247
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『易学啓蒙』試論

――明蓍策を中心に――

辛　賢

はじめに

『易学啓蒙』は、淳熙十三年（一一八六）三月、朱熹が『周易本義』を著してより十年後に完成した著述である。(1) 朱熹は刻版後も十数年の間、修訂を繰り返しており、(2) 同書に対する学問的な熱意は特別なものがあった。(3) 朱熹は「自序」のなかで著述の目的を記し、初学に確実な理論基礎を提示するためであると述べている。(4) しかし「初学」とはいえ、『易学啓蒙』の内容は決して平易なものではない。そもそも「啓蒙」の名は、謙辞をもって控えめに名づけたのであったが、かえって不遜に近いと考え、別の名に改めたいと、師友の蔡元定に告げている。(5)

『易学啓蒙』は、「本図書第一」「原卦画第二」「明蓍策第三」「考変占第四」の四篇で構成される。執筆当初は、卦画篇と蓍策篇との二篇で構成を考えていたが、(6) 七八九六の説が河図・洛書に由来することを踏まえて「本図書第一」を加え、さらに蓍策篇のなかに含まれていた卦変図を分離して別の一篇にまとめたのが「考変占第四」である。

本稿で取りあげる「明蓍策第三」は、繫辞伝の「大衍の数」章にみえる筮法を解き明かしたものである。周易の筮法そのものに関しては、今日、一般にも広く知られているが、解釈史・思想史研究上、じつに複雑で難解な問題を孕んでいる。それは単に「明蓍策」に限らない。今日、『易学啓蒙』に関する研究がほとんどないのも、同書の難解さを物語っているが、本稿では、「明蓍策第三」所収の点策図を

検討し、蓍策法をめぐる朱熹の解釈と特徴を探ることにしたい。

一　奇と偶

「明蓍策」は、次の繫辞伝「大衍之数」章にみられる揲法を解き明かす内容で構成される。

大衍の数は五十。其の用は四十有九。分かちて二と為し以て両に象り、一を掛けて以て三に象り、之を揲するに四を以てし以て四時に象る。奇を扐に帰して以て閏に象る。五歳にして再閏あり。故に再扐して而る後に掛く。（繫辞伝）

「大衍之数」章は古くから議論の絶えないところであるが、とくに「五十」という数字をめぐって、漢代以降、様々な解釈が行われてきた。[7] 朱熹の場合、「河図・洛書の中数は皆五。之を衍して各々其の数を極め、以て十に至れば、則ち合わせて五十と為る」（『易学啓蒙』明蓍策）と述べ、大衍の数が五十である理由を河図・洛書の数から導き出している。そして、分・掛・揲・帰を経て得られる残余の策数のパターンについて、次のように示している。それでは、まず第一変（＝初変）から検討することにする。

五つを得る者は三つ、所謂る奇なり。〔割注〕五なるものの掛一を除けば、即ち四なり。四を以て之を約せば一と為る。故に奇と為れば、即ち両儀の陽数である。

九を得る者は一つ、所謂る偶なり。〔割注〕九なる者の掛一を除けば、即ち八つなり。四を以て之を約せば二と為る。故に偶と為れば、即ち両儀の陰数なり。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

【表一】第一変（◎は掛一策、●は左右の扐策。数字は左右の扐策を示す。以下同様）

偶	奇	
左　右	左　右	
	● ●　● ● ◎ (3.1)	扐 掛
	●　● ●　● ◎ (2.2)	扐 掛
●　● ●　● ●　● ●　● ◎ (4.4)	● ●　● ● ◎ (1.3)	扐 掛

本稿で取りあげる【表一】～【表六】は、『易学啓蒙』所収の六枚の図を再構成したものである。便宜上、掛一策を◎と印すことで、扐策●と区分できるように改めた。便宜上、左右の扐策の数を数字で示し一目できるようにした。

さて、易卦は、一卦の六爻を得るには十八変しなければならない。繫辞伝に「四営して易を成す。十有八変して卦を成し、八卦にして小成す」とあるように、筮竹を二分し、一本を小指に掛け、四本ずつ数え、残余を指間にはさむ、この分・掛・揲・帰の四度の営みを経て、蓍策の変化の第一変が成る。三変して一爻が得られ、十八変して一卦の六爻が得られるのである。その一爻を得る三変の過程において割り出される残余の数は自ずから決まって来る。朱熹はそのパターンを示しているのである。

すなわち、第一変において得られる扐策の数は、掛一策（◎）をあわせて五本か九本である。五本は奇に属し、九本は偶に属する。そのうち、残余が五本（奇）になる場合の数は、左が一策であれば、右は三策、右が二策であれば、左も二策、左が三策であれば、右は一策と自ずから決まってくる。掛一策を合わせて残余は五本となる。一方、残余の数が偶の九本になる場合の数は、左4策・右4策の一回のみとなる。掛一策を合わせて残余は九本となる。【表一】は以上の内容を示したものである。

ここで、五本を奇、九本を偶とする理由について、朱熹自ら割注を付しているように、五本中、掛一策（◎）を除く四本を四（四時に

象る）で約分すると、商は一、奇数に当たる。一方、九本の場合、同じく掛一作を除く八本を四で約分すると、商は二、偶数に当たる。すなわち、残余を四で約した商が奇数か偶数かによって分けていることがわかる。朱熹は、これらの奇偶をもって両儀陰陽の数と見なしているのである。

ところが、朱熹自ら述べるように、これは旧法とは異なった技法であるという。

且つ旧法を用うれば、則ち三変の中、又、前の一変を以て奇と為し、後の二変を偶と為す。奇なるが故に其の余りは五と九。偶なるが故に其の余りは四と八。余りの五・九なるは、五は三つにして九は一つ、亦た囲三径一の義なり。余り四・八なるは、四・八皆二つ、亦た囲四用半の義なり。三変の後、老なるは陽饒かにして陰乏しく、少なるは陽少くして陰多し。亦た皆自然の法象あり」（『易学啓蒙』「明蓍策」）

すなわち、旧法では、単純に掛扐の数が奇数か偶数かで奇偶を決めており、たとえば、第一変の掛扐の数は五か九、いずれも奇数であることから、第一変を「奇」に属し、後述する第二・第三変の掛扐の数は四か八、いずれも偶数であることから「偶」に属すると見なしていた。朱熹は旧法もまた「自然の法象あり」と認めていながら、なぜ旧法を取らず、独自の技法を考案したのか、その理由について述べていない。

さて、以上の第一変が終わり、第二変に移ることにしよう。

一変の後に前の余数を除き、復び其の見存の策を合わせば、或いは四十、或いは四十四にして、分掛揲帰は前の法の如し。是れ再変と謂う。其の掛扐は四ならざれば則ち八。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

第一変を経て、四十九策から残余の策（五本か九本）を取り除くと、残りは四十本か四十四本となる。第二変も第一変と同じく、分・掛・揲・帰の手順にしたがって捌く。

四つを得る者は二つ、所謂る奇なり。掛一を去らず、余りは前義と同じ。
八つを得る者は二つ、所謂る偶なり。掛一を去らず、余りは前義と同じ。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

【表二】第二変・第三変

偶		奇		
左	右	左	右	
● ● ● ● ◎ (4.3)	● ● ● ●	● ◎ (1.2)	● ●	扐掛
● ● ● ● ◎ (3.4)	● ● ● ●	● ● ◎ (2.1)	● ●	扐掛

第二変で得られる掛扐の数は、四本か八本である。四本の場合は、掛一策（◎）のほか、左2策・右1策、または左1策・右2策の二通りがある。掛一策（◎）を合わせると四本となる。初変と同じく四（四時）で約分すれば、商は一、「奇」に属する。一方、掛扐が八本となる場合は、左4策・右3策、または左3策・右4策の二通りである。掛一策（◎）を合わせると八本となる。同じく四で割ると、商は二、「偶」に属する。初変と同様に奇偶の両数は両儀の陰陽の数をあらわす。ここで注意するところは、第一変では掛一本を除いた左右扐策の数を四払いしていたのに対し、第二変は掛一策を合わせていることである。朱熹はその理由についてとくに触れていない。

再変の後、前の両次の余数を除き、復び其の見存の策を合わせば、或いは四十、或いは三十六、或いは三十二。分・掛・揲・帰は前法の如し。是れ三変と謂う。其の掛扐は再変の例の如し。三変既に畢われば、乃ち三変を合わせ、其の掛扐の奇偶を視て以て遇う所の陰陽の老少を分かたば、是れ一爻と為る。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

第二変が終わり、残余（四本か八本）を取り除けば、残りの策は四十本か三十六本、または三十二本となる。さらに同じく分・掛・揲・帰の手順にしたがって残策を捌けば、第二変と同じく、残余は四本か八本となる。以上の全三変が終われば、各変の奇偶をもとに陰陽の老少を決定する。その方法を元・胡方平がコンパクトにまとめているので、ひとまず確かめておこう。

掛扐の四と五を奇と為し、九と八を偶と為す。三奇を老陽と為し、老陽に遇う者は、其の爻を□と為し、所謂る重なり。二奇一偶を少陰と為し、少陰に遇う者は、其の爻を⚋と為し、所謂る拆なり。二偶一奇を少陽と為し、少陽に遇う者は、其の爻を⚊と為し、所謂る単なり。三偶を老陰と為し、老陰に遇う者は、其の爻を×と為し、所謂る交なり。（『易学啓蒙通釈』「明蓍策」、以下『通釈』と称す。）

すなわち、三変の結果、五（奇）・四（奇）・四（奇）の三奇であれば「老陽」、その爻は「□」で表記し、「重」と呼ぶ。五（奇）・四（奇）・八（偶）、五（奇）・八（偶）・四（奇）、九（偶）・四（奇）・四（奇）の二奇一偶であれば「少陰」、その爻は「⚋」と表記し、「拆」と呼ぶ。五（奇）・八（偶）・八（偶）、九（偶）・四（奇）・八（偶）、九（偶）・八（偶）・四（奇）の一奇二偶であれば「少陽」、その爻は「⚊」と表記し、「単」と呼ぶ。最後に九（偶）・八（偶）・八（偶）であれば「老陰」、その爻は「×」と表記し、「交」と呼ぶ。

	三奇	二奇一偶			一奇二偶			三偶
三変	４奇	８偶	４奇	４奇	８偶	８偶	４奇	８偶
二変	４奇	４奇	８偶	４奇	８偶	４奇	８偶	８偶
一変	５奇	５奇	５奇	９偶	５奇	９偶	９偶	９偶
老少	老陽	少陰			少陽			老陰
表記	□	⚋			⚊			×
名称	重	拆			単			交

二　場合の数

これまで述べてきた奇偶の技法をもとに、三変を通じて三奇（老陽）・両奇一偶（少陰）・一奇両偶（少陽）・三偶（老陰）が得られる場合の数について、朱熹は「点策図」をもって図示している。先述したように、本稿ではそれらの点策図を再構成し、便宜上の修正を行った。まず、次の【表三】「三奇」の場合の数から確認する。

【表三】から分かるように三奇の老陽が得られる場合の数は全部で十二通りである。まず、第一変で掛扐合わせて五策となるのは、左右の扐策が（1.3）（2.2）（3.1）の三通り、第二では（1.2）（2.1）の二通り、第三変でも同じく（1.2）（2.1）の二通りである。これら三変の変数（場合の数）を交互に組み合わせると、【表三】の通りである。【表三】の右下から上方に向かって辿っていくと、（1.3）（1.2）（1.2）、（2.2）（1.2）（1.2）、（3.1）（1.2）（1.2）……（3.1）（2.1）（2.1）までとなる。全部で十二通りの三奇老陽が得られる。

【表三】「三奇」の場合の数

左　右	左　右	左　右	左　右	
●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	三変
●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	●　● ● ◎ (1.2)	二変
●　● ● ● ◎ (3.1)	●　● ● ● ◎ (3.1)	●　● ● ● ◎ (3.1)	●　● ● ● ◎ (3.1)	一変
●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	三変
●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	●　● ● ◎ (1.2)	二変
●　● ● ● ◎ (2.2)	●　● ● ● ◎ (2.2)	●　● ● ● ◎ (2.2)	●　● ● ● ◎ (2.2)	一変
●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	三変
●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	●　● ● ◎ (1.2)	二変
●　● ● ● ◎ (1.3)	●　● ● ● ◎ (1.3)	●　● ● ● ◎ (1.3)	●　● ● ● ◎ (1.3)	一変

ちなみに宋の林至は著述『易裨伝』のなかで、点策図をすべて数字に置き換えて示している。

第一揲、第二揲、第三揲。第一揲、第二揲、第三揲。
右左挂、右左挂、右左挂。右左挂、右左挂、右左挂。
三一一、二一一、一二一。三一一、一二一、二一一。
二一一、二一一。一二一、一二一。
二二一、二一一、一二一。二二一、一二一、二一一。
二一一、二一一。一二一、一二一。
一三一、二一一、一二一。一三一、一二一、二一一。
二一一、二一一。一二一、一二一。（宋・林至『易裨伝』「極数」）

また、林至の記述をもとに図示すると、次のようになろう。

第一揲 (右. 左. 掛)	第二揲 (右. 左. 掛)	第三揲 (右. 左. 掛)
(3. 1. 1)	(2. 1. 1)	(1. 2. 1)
(3. 1. 1)	(1. 2. 1)	(2. 1. 1)
(3. 1. 1)	(2. 1. 1)	(2. 1. 1)
(3. 1. 1)	(1. 2. 1)	(1. 2. 1)
(2. 2. 1)	(2. 1. 1)	(1. 2. 1)
(2. 2. 1)	(1. 2. 1)	(2. 1. 1)
(2. 2. 1)	(2. 1. 1)	(2. 1. 1)
(2. 2. 1)	(1. 2. 1)	(1. 2. 1)
(1. 3. 1)	(2. 1. 1)	(1. 2. 1)
(1. 3. 1)	(1. 2. 1)	(2. 1. 1)
(1. 3. 1)	(2. 1. 1)	(2. 1. 1)
(1. 3. 1)	(1. 2. 1)	(1. 2. 1)

さて、朱熹は「三奇」について、以下のように説いている。

三奇を老陽と為すは、凡そ十有二なり。掛扐の数は十有三、初掛一つを除きて十有二と為る。四を以て約して之を三分すれば、一為る者は三つ。一奇は円に象りて三を囲むが故に三つの一の中に各々復た三有り。而して三つの三の数を積めば、則ち九と為る。過揲の数は三十有六、四を以て之を約せば、亦た九を得。即ち四象の太陽は、一に居りて九を含むの数なり。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

ここで、胡方平の解釈を併せて参照すると、

已下の四図は、老少掛扐の数を引き、而して図説す。又、兼ねて過揲の数に及ぶなり。この図は老陽掛扐の数を明らかにす。一箇の五、両箇の四、是れを三奇と為す。「凡そ十有二」とは、老陽の数を言うに、其の変わること凡そ十二様なり。掛扐の数は十有三にして初掛の一を除きて十有二と為る。四を以て其の十二策の数を約して三変を以て之を分かつに一変ごとに計四数なり。（『通釈』「明蓍策」）

と述べられている。すなわち、三奇の老陽は、五策（第一変）・四策（第二変）・四策（第三変）が出る場合に当たる。合わせて十三策となる。「三奇を老陽と為すは、凡そ十有二」というのは、掛扐の策数から初変の掛一策を除いた数である。そして、三奇（老陽）の場合の数も同じく十二通りとなり、掛扐の合わせた数と一致する。三奇の十二策は四（四時）で約分し、さらに三変で分ければ、一変ごとに四数があたる。

ここで、「一為る者は三つ」以下について、胡方平は以下のように詳解している。

「一と為る者は三つ」とは、謂うこころは、一箇の四策を一と為し、一は即ち四なり、即ち奇なり。故に四と言わずして一と言う。三変を合わせば、則ち一為る者、凡そ三つなれば、四と為る者の凡そ三つなるを謂う。一奇は円に象りて三を囲み、参天の義に本づ

く。是れ四策の中に於いて一策を取りて以て円に象り、而して三策を以て三を囲むを為して其の全き者を用う。此れ一の中に復た三有るなり。是の如くして円に象り三を囲むは、凡そ三あり。三奇を合わせて其の全きを用うる者にして言えば、則ち三一の中、各々復た三 ∴ ∴ ∴ 有り、三三∴∴∴を積みて老陽の九と為る。四を以て約すれば過揲三十六も亦た四箇の九を得るなり。（『通釈』「明蓍策」）

「一為る者」の「一」とは四策を「一つ」に束ねた数である。言い換えると、各変の五（掛一含む）・四・四を四（四時）で約分すると、商はいずれも一であり、一奇である。三変合わせて三奇となる。「一奇は円に象りて三を囲む」とは、一奇（四策）は、繫辞伝の「参天両地」によって天の円形を表象する。直径一（一策）に対する円周三（三策）をあらわすのである。[8] したがって、三奇（四策×三）となれば、朱熹が「三つの一の中に各々復た三有り」と述べているように、四策（径一＋円周三）・四策（径一＋円周三）・四策（径一＋円周三）と、三つの径一のなかにそれぞれ円周三があることを示しているのである。胡方平はそれを「三一の中、各々復た三 ∴ ∴ ∴ 有り」と述べている。そして、「三三∴∴を積みて老陽の九と為る」というように、円周三を三つ積み上げると（3×3）、老陽の九となる。それは過揲の三十六策（残余を除いた残りの策）を四で除して九を得るのと一致する。したがって、「四象の太陽は、一に居りて九を含むの数」というように、一（奇）は一に居りながら九を含む数であるというのである。以上が【表三】の三奇に関する内容である。

次に【表四】の「両奇一偶」について検討する。

【表四】「両奇一偶」の場合の数

左 右	左 右	左 右	左 右					
(2.1)	(1.2)	(2.1)	(1.2)					三変
(2.1)	(2.1)	(1.2)	(1.2)					二変
(4.4)	(4.4)	(4.4)	(4.4)					一変
(2.1)	(1.2)	(2.1)	(1.2)	(4.3)	(3.4)	(4.3)	(3.4)	三変
(4.3)	(4.3)	(3.4)	(3.4)	(2.1)	(2.1)	(1.2)	(1.2)	二変
(3.1)	(3.1)	(3.1)	(3.1)	(3.1)	(3.1)	(3.1)	(3.1)	一変
(2.1)	(1.2)	(2.1)	(1.2)	(4.3)	(3.4)	(4.3)	(3.4)	三変
(4.3)	(4.3)	(3.4)	(3.4)	(2.1)	(2.1)	(1.2)	(1.2)	二変
(2.2)	(2.2)	(2.2)	(2.2)	(2.2)	(2.2)	(2.2)	(2.2)	一変
(2.1)	(1.2)	(2.1)	(1.2)	(4.3)	(3.4)	(4.3)	(3.4)	三変
(4.3)	(4.3)	(3.4)	(3.4)	(2.1)	(2.1)	(1.2)	(1.2)	二変
(1.3)	(1.3)	(1.3)	(1.3)	(1.3)	(1.3)	(1.3)	(1.3)	一変

両奇一偶は、偶を以て主と為し、少陰と為る者の凡そ二十有八なり。掛扐の数、十有七、初掛の一を除けば、十有六と為る。四を以て約して之を三分し、一為る者二、二為る者一なり。一奇は円に象りて其の全きを用う。故に二つの一の中に各々復た三有り。二は偶にして方に象りて其の半ばを用う。故に一つの二の中に復た二つ有り。而して二つの三と一つの二との数を積めば、則ち八と為る。過揲の数は三十有二、四を以て之を約して亦た八を得。即ち四象の少陰、二に居り八を含むの数なり。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

両奇一偶は、五（奇）・四（奇）・八（偶）、五（奇）・八（偶）・四（奇）、九（偶）・四（奇）・四（奇）の三通りである。五策（掛一策を含む）と四策は奇（一）、八策と九策は偶（二）に当たり、三変を通じて両奇一偶となる。両奇一偶のうち、比例数の少ない「偶」が三変の主（中心）に当たる。

両奇一偶の少陰になるのは、全部で二十八通りある。掛扐の策数の合計は、三変合わせて十七策（5＋4＋8、9＋4＋4）であり、初変の掛一策を除して十六策となる。先述したように、一奇は円に象り其の全きを用いることから、二つ（両奇）の一（直径）のなかにはそれぞれ三策（円周）を含む。これに対して、「二」（八策を四で約した商）は偶であり、地の方形を表象する。繫辞伝の「参天両地」の義にもとづく。「一つの二の中に復た二つ有り」とは、胡方平は次のように解している。

二は偶にして方に象りて半を用う。亦た両地の義に本づく。是れ一変八策の中より、其の四を去りて用いず、而して存する所の四策の中より二策を取りて以て方に象る。而して二策を以て囲四と為して其の半を用う。故に二の中に復た二⚏有り。二つの三一つの二⚎を積みて少陰の八と為す。（『通釈』「明蓍策」）

二は偶であり、それは一変の八策から四策を取り除き、残りの四策のうち半分の二策を取る。四策の半分の二策で四面（⚏）を囲み、地の方形を表象する。それは、二（四策）の中にまた二（二策ずつ）があることを意味する。したがって、三の二つ（両奇3×2）と二の一つ（一偶2×1）を合わせて少陰の八とする。それは過揲の策数（掛扐を除いた残りの策数）三十二策を四（四時）で除して八を得るのと一致する。まさに朱熹が「四象の少陰、二に居り八を含むの数なり」というように、両奇一偶の主である「一偶」は、「二」に居

りながら「八」を含むことを表している。

次に【表五】の「両偶一奇」について述べる。

【表五】「両偶一奇」の場合の数

	左　右	左　右	左　右	左　右	左　右	左　右	左　右	左　右
三変	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ◎ (1.2)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ◎ (1.2)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)
二変	●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (2.1)	●　● ● ◎ (1.2)	●　● ● ◎ (1.2)
一変	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.4)
三変	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)				
二変	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)				
一変	●　● ● ● ◎ (3.1)	●　● ● ● ◎ (3.1)	●　● ● ● ◎ (3.1)	●　● ● ● ◎ (3.1)				
三変	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)				
二変	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)				
一変	●　● ●　● ◎ (2.2)	●　● ●　● ◎ (2.2)	●　● ●　● ◎ (2.2)	●　● ●　● ◎ (2.2)				
三変	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)				
二変	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (4.3)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)	●　● ●　● ●　● ● ◎ (3.4)				
一変	●　● ● ● ◎ (1.3)	●　● ● ● ◎ (1.3)	●　● ● ● ◎ (1.3)	●　● ● ● ◎ (1.3)				

両偶一奇、奇を以て主と為し、少陽と為る者凡そ二十。掛扐の数二十有一、初掛の一を除きて二十と為る。四を以て約して之を三分すれば、二と為る者は二つ、一と為る者は一つ。二の偶は方に象りて其の半ばを用う。故に二つの二の中に各々復た二有り。一奇は円を象りて其の全きを用う。故に一つの一の中に復た三有り。而して二つの二と一つの三の数を積めば、則ち七と為る。過揲の数は二十有八、四を以て之を約して亦た七を得る。即ち、四象の少陽、三に居り七を含むの数なり。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

両偶一奇（少陽）は「一奇」を主とする。五（奇）・八（偶）・八（偶）、九（偶）・四（奇）・八（偶）、九（偶）・八（偶）・四（奇）の三通りある。三変通じて両奇一偶が得られる場合の数は、合計二十通りである。掛扐の策数も二十一策（5＋8＋8、9＋4＋8、9＋8＋4）であり、初変の掛一策を除けば二十策となる。四（四時）で三分すると、二（偶・8策9策）になるのは二つ、一（奇・5策4策）になるのは一つ。すでに詳述したように、二の偶は地の方形に表象し、八策の半分を用いることから、二つの二の中にそれぞれ二策ずつを含む。一奇は天の円形に表象し、その全きを用いることから、一つの一奇のなかにまた三策を含む。したがって、二つの二策（2×2）と一つの三策（1×3）を積めば、七策となる。掛扐を除いた過揲の数は二十八策であり、四で割るとやはり七を得る。すなわち、少陽の両偶一奇は三（一奇）に居りながら七を含む数である。

最後に【表六】「三偶」について検討する。

【表六】「三偶」の場合の数

	左　右	左　右	左　右	左　右
三変	●●●●◎（4.3）	●●●●◎（3.4）	●●●●◎（4.3）	●●●●◎（3.4）
二変	●●●●◎（4.3）	●●●●◎（3.3）	●●●●◎（3.4）	●●●●◎（3.4）
一変	●●●●◎（4.4）	●●●●◎（4.4）	●●●●◎（4.4）	●●●●◎（4.4）
三変				
二変				
一変				
三変				
二変				
一変				
三変				
二変				
一変				

三偶を老陰と為す者四つあり。掛扐の数は二十有五、初掛の一を除きて二十有四と為る。四を以て約して之を三分すれば、二を為す者は三あり。二の偶は方に象りて其の半ばを用うるが故に三つの二の中に各々復た二有り、而して三つの二の数を積めば、則ち六と為る。過揲の数も亦た二十有四、四を以て之を約して亦た六を得る。即ち四象の太陰は四に居りて六を含むの数なり。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

三偶は老陰であり、九（偶）・八（偶）・八（偶）の一例のみとなる。老陰になる場合の数は、全部で四通りである。掛扐の策数は初掛一策と扐二十四策とをあわせて二十五策であるが、初掛一策を除けば二十四策である。「四を以て約して三分すれば、二を為す者は三つ」

について、胡方平は以下のように詳述している。

凡そ四なるは、老陰の数、其の変の凡そ四様なるを言うなり。掛扐の数二十五、初掛の一を除きて二十四と為り、四を以て其の二十四数を約す。而して三変を以て之を分かち、一変ごとに計八数なり。「二を為す者は三つ」とは、二箇の四策を二と為し、二は即ち八なり、即ち偶なり。故に八と言わずして二と言う。三変を合わせば、則ち二を為す者、凡そ三つ。八を為す者凡そ三つなるを謂うなり。（『通釈』）

という。すなわち、「二を為す者は三つ」とは、二箇の四策を「二」（偶）として計八策をいうのである。三変合わせて二（八策）を為すものが三つということで、計二十四策である。

二の偶は方に象りて半を用い、両地の義に本づく。是れ三変八策の中より各々四を去りて用いず。而して各々存する所の四策の中より、各々二策を取りて以て方に象る。而して各々二策を以て囲四を為して半を用うるに、此れ二の中に復た二有るなり。是の如くして方に象り四を囲む者は凡そ三つあり。三偶を合わせて半を用うる者にして言えば、則ち三つの二の中に各々復た二有り、三つの二を積みて老陰の六と為す。四を以て過揲の二十四を約し、亦た四箇の六を得るなり。（『通釈』）

二（偶）は、地の方形に象り、その半を用いる。三変（8策×3）より各々四策を取り除き用いない。そして残る半分（四策）のなかから、二策を取って地の方形に象る。二策をもって方形の四周を囲むので、二のなかに二を含む。三変合わせて、二が三つある。すなわち、「三つの二の中に各々復た二有り」ということである。それらの三つの二を積み重ねて老陰の六と為す。過揲の策数二十四を四払いして（4×6）、四つの六を得るのと一致する。太陰は四に居りながら六を含む数であることを表しているのである。

以上、「明蓍策」所収の四図を中心に、蓍策法とその意味について検討した。ところが、蓍策の掛法をめぐって「後二変不掛」とする説があり、朱熹はその問題点を指摘している。

三　郭雍の「後二変不掛」説

問題の所在は、繫辞伝の「再扐而後掛」に対する解釈にある。それは、分・掛・揲・帰における掛一策を取るのは、三変中、初変に限るのか、それとも三変すべてにおいて行うべきかの問題である。

凡そ此の四者は、皆三変皆掛くるの法を以て之を得たり。蓋し経に曰く、「再び扐して後に掛く」と。又曰く、「四營して易を成す」と。其の指（むね）、甚だ明らかなり。注疏は詳説せざると雖も、然れども劉禹錫の記す所の僧一行、畢中和、顧彖の説に亦た已に備われり。近世の諸儒、乃ち前の一変独り掛けて、後の二変は掛けざるの説あり。之を経に考うるに、乃ち六扐して後に掛くると為すは、「五歳再閏」の義に応ぜず。且つ後の両変の又二營に止まるに、蓋し已に誤れり。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

これまで朱熹の示した四図では、三変すべて掛一策を取っていたが、近世の諸儒は初変にだけ掛一策を取り、再変・三変は取らないとしていることに対し、朱熹は誤りであると指摘しているのである。さらに『周易正義』はとくに詳述していないが、[9] 唐の劉禹錫は畢中和[10]の説を引用し、この問題について触れている。

中和は其の師に本づき、師の学は、一行に本づくと云う、
第一指　余一益三、余二益二、余三益一、余四益四。
第二指　余一益二、余二益一、余三益四、余四益三。
第三指　第二指と同じ。（「弁易九六論」『劉賓客文集』巻七「論下」）

畢中和の揲法は、「其の伝、一行禅師に原づく」（「弁易九六論」）とあるように、唐僧の一行に由来するものという。それによると、第一指（初変）・第二指（再変）・第三指（三変）における左右の余りを示しており、「余り一ならば三を益し、余り二ならば二を益し、余

り四ならば四を益す」というように【表一】【表二】の奇偶の残余の策を示したものである。さらに続けて、老陽・老陰・少陽・少陰各々の策数については次のように記している。前掲の【表三】から【表六】と同様の内容である。そのうち、老陽の記述のみを原文のまま取りあげると、以下の通りである。

第一指　遇一益三、并掛一為五。遇三遇二、並謂之少。与一同。
第二指　遇一益二、并掛一為四。
第三指　遇一益二、并掛一為四。
右、三指俱遇少、通計十三策。其餘三十六策、四四運之、得九為老陽。故易繫云、乾之策二百一十有六。注云、陽爻九、一爻三十六策、六爻二百一十有六。（「弁易九六論」（『劉賓客文集』巻七「論下」）

初変の掛扐の数は五策（少・奇）か九策（多・偶）かに当たる。三変通じて老陽を得る場合は、初変で五策、再変で四策、三変で四策を得なければならない。したがって、初変の扐数は、（1. 3）か（3. 1）、または（2. 2）のいずれかであり、「掛」一策を合わせた扐数は五策である。傍線のところにあるように、再変・三変も掛一策を取っていることが分かる。

近世の儒者、郭雍の著す所の蓍卦辨疑の若きは、専ら前の一変を以て独り掛け、後の二変は掛けず。其の横渠先生の言を載せて曰く、「再扐して後に掛け、一爻を成すごとに而して後に掛くるなり。第二第三揲は掛けざるを謂うなり」と。（『易学啓蒙通変』「明蓍策」第三）

郭雍の「蓍卦辨疑」は、[11] 今に伝わらず未詳であるが、朱熹によれば、「掛」の取り方について、郭雍は初変のみに限定し、再変・三変では「掛」を不要としている。張載の説にしたがっているらしいが、朱熹は、「此の説は大いに誤りて、恐らく横渠の言に非ざるなり」（「蓍卦考誤」『晦庵集』巻六十六）と斥けながら、三変すべてに掛一策を取らねばならない理由を、次のように記している。

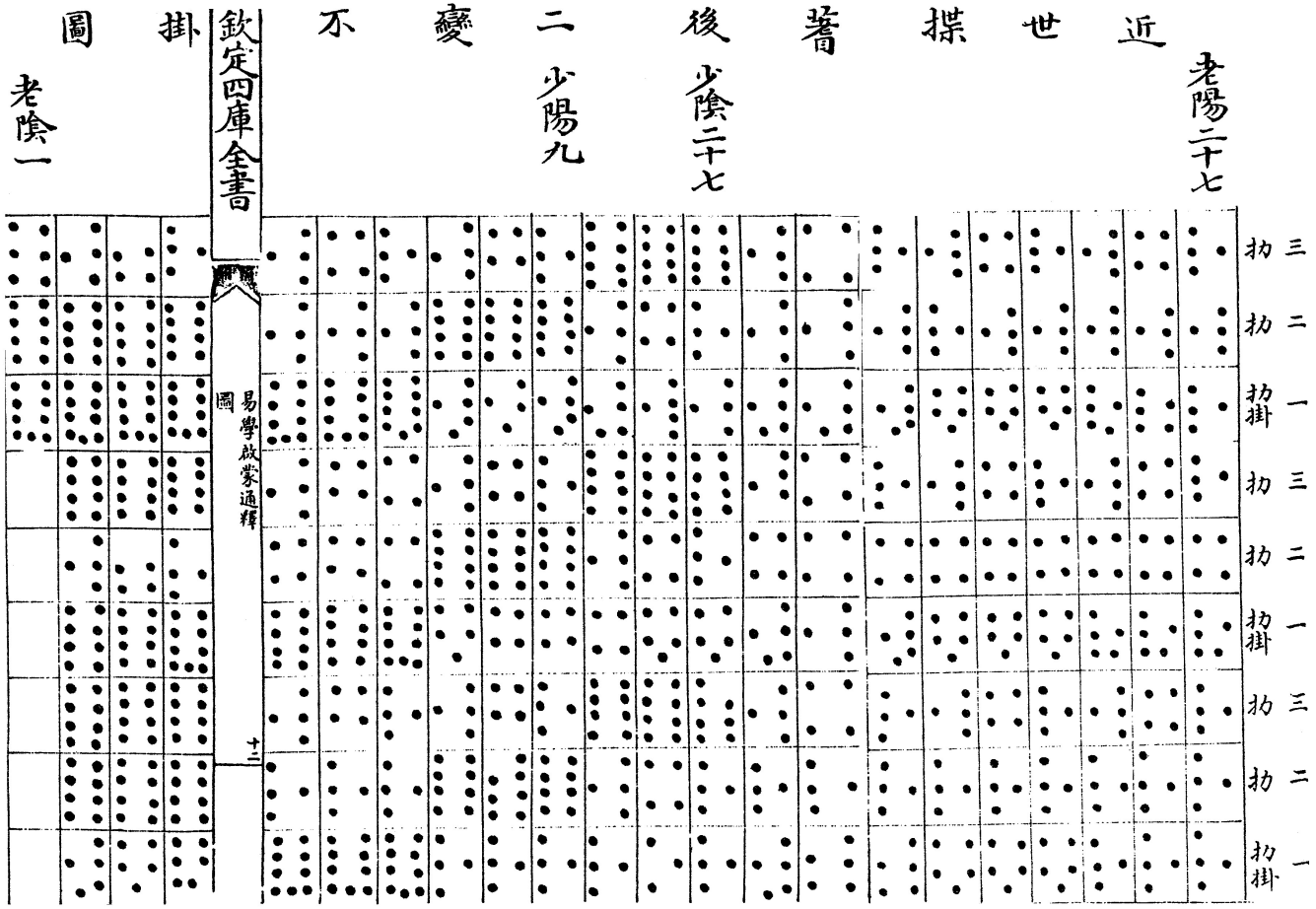
掛けざるべからざる所以の者は両説有り。蓋し三変の中、前の一変は陽に属す。故に其の余は五か九にして皆奇数なり。後の二変は陰に属す。故に其の余は四か八にして皆偶数なり。陽に属するは、陽三と為して陰一と為せば、皆囲三径一の術なり。陰に属するは、陰二と為し陽二を為せば、皆囲四用半の術を以てなり。是れ皆三変皆掛くるの法を以て之を得、後の両変は掛けざれば、則ち得ざるなり。三変の後、其の老陽と為すべき者は十二、老陰と為すべき者は四、少陰と為す者は二十八、少陽と為すべき者は二十なり。多寡の同じからざると雖も、皆法象有り。是れも亦た三変皆掛くるの法を以て之を得て、後の両変は掛けざれば、則ち得ざるなり。（「著卦考誤」『晦庵集』巻六十六）

すなわち、三変のうち、初変は陽に属し、再変・三変は陰に属するという。その理由について、初変は左右の余りが五か九の奇数であり、再変・三変は四か八の偶数であるとしたうえ、陽に属するものは、陽三陰一の「囲三径一」にもとづき、陰に属するものは、陽二陰二の「囲四用半」にもとづくものとする。三変して後、老陽が十二通り、老陰が四通り、少陰が二十八通り、少陽が二十通りと、各々の場合の数が得られるのも、三変すべてに掛けているからであり、後の第二・第三変に掛けなければ得られないと、朱熹は指摘している。

若し近世の法を用うれば、則ち三変の余は皆囲三径一の義を為して復た奇偶の分無し。三変の後に老陽少陰と為す者、皆二十七、少陽と為す者は九、老陰と為す者は一。又皆参差斉しからずして復た自然の法象無し。此を以て其の説の誤りを見るに足れり。（『易学啓蒙』「明蓍策」）

すなわち、掛一策を初変のみに限って取った場合、老陽（三奇）と少陰（両奇一偶）は二十七通り、少陽（一奇両偶）は九通り、老陰（三偶）はわずかに一例（初変左4右4、再変左4右4、三変左4右4）のみとなる。それは「参差斉しからず」と、陰陽の老少の数に不規則さが目立って自然の法象が見られないと指摘している。胡方平は、後二変不掛を用いた場合の点策図を作成しており、以下に掲載しておく。

近世揲蓍後二変不掛図（胡方平『易学啓蒙通釈』に所収）



終わりに

本稿では、『易学啓蒙』「明蓍策第三」における点策図の仕組みについて検討し、繫辞伝の筮法に対する朱熹の理解について考察した。点策図は、三変における左右扐策の数を公理的に示し、その順列と組み合わせによって四つの類型（三奇・両奇一偶・両偶一奇・三偶）に属する事象の数をすべて算出したものであった。それは数の自律性に則った極めて数学的方法を用いるものであったが、一方では、郭雍の例にみられるごとく、「掛」の取り方について陰陽老少のバラツキを意図的に調整していた。「掛」の取り方については、郭雍の説が純数理的に処理しているように思えるが、本稿では今後の問題点として残しておきたい。

注

（1）『易学啓蒙』を詳論した主要な研究として、以下の論考が挙げられる。白寿彝「周易本義考」（『史学集刊』第一号、一九三六）、戸田豊三郎『易経注釈史綱』（風間書房、一九六四）五六九頁～六一四頁、鈴木由次郎「朱子と易」（『朱子学入門』所収、明徳出版社、一九七四）、吾妻重二「朱熹の象数易学とその意義」（『朱子学の新研究』創文社、二〇〇四）二四四頁～二八八頁、張朝南「《周易本義》与《朱子語類》易論比較」（『国研所集刊』第三八号、一九九四）。

（2）白寿彝「周易本義考」（『史学集刊』第一号、一九三六）を参照。「啓蒙中、欲改数処。今籤出奉呈。幸更審之。可改、即改為佳、免令旧本流布太広也。但恐不好看、亦無可奈何耳」（『晦庵続集』巻二「答蔡季通」）、「啓蒙已為看畢、錯誤数処已正之。又欲添両句、恐亦不難。但註本尊丈両句、不甚分明。不免且印出、俟其帰、却商量、今不能久待也」（『晦庵続集』巻三「答蔡伯静」）

（3）実際に朱熹は『易学啓蒙』を『大学』に並ぶほどの著述であると自負している。「説大学啓蒙畢、因言某一生只看得這両件文字透、見得前賢所未到処」（『朱子語類』巻十四）

（4）「近世学者、類喜談易、而不察乎此。其専於文義者、既支離散漫、而無所根著。其渉於象数者、又皆牽合傅会、而或以為出於聖人心思智慮之所為也。若是乎、予竊病焉。因與同志頗輯旧聞、為書四篇、以示初学、使毋疑於其説云。淳熙丙午莫春既望、雲台真逸手記。」（『易学啓蒙』原序）

（5）「啓蒙之名、本以為謙、而反近於不遜。不知別有何字可改、幸更為思」（『晦庵集続集』巻二「答蔡季通」）

（6）「前日七八九六之説、於意云何。近細推之、乃由河図而来。欲於啓蒙之首増此一篇、并河図洛書以発其端。而揲蓍法中、只自大衍以下、又分卦変図別為一篇」（『晦庵集』巻四四「答蔡季通」）

（7）繫辞伝の「大衍之数者、五十。其用四十有九」をめぐって、漢代以降、京房・馬融・鄭玄・王弼など学者の間で多様な解釈が出された。「王弼曰、演天地之数所頼者五十也。其用四十有九、則其一不用也。不用而用以之通、非数而数以之成。斯易之太極也。四十有九、数之極也。夫无不可以无明、必因於有。故常於有物之極、而必明其所由之宗也。京房云、五十者、謂十日十二辰二十八宿也。凡五十、其一不用者、天之生気、将欲以虚求実。故用四十九焉。馬季長云、易有太極、謂北辰也。太極生両儀、両儀生日月、日月生四時、四時生五行、五行生十二月、十二月生二十四気。北辰居位不動、其余四十九転運而用也。荀爽云、卦各有六爻。六八四十八。加乾坤二用、凡有五十。乾初九潜龍勿用、故用四十九也。鄭康成云、天地之数五十有五。以五行気通、凡五行減五。大衍又減一。故四十九也。姚信・董遇云、天地之数五十有五者、其六以象六画之数。故減之而用四十九。但五十之数、義有多。家各有其説、未知孰是」（『周易正義』繫辞上伝・孔穎達疏）

（8）掛扐の一を除き、四十八を四分して其の一を得るは、四十九策を以て初掛の一を除き、而して四十八策を四分して計ること四箇の十二なり。其の中に於いて一箇の十二を得。是れを四分中の一分と為し、其の十二を一にして其の四を三にするなり。一箇十二も亦た径一の義なり。三箇の四も亦た囲三の義なり。即ち上文の三三の数は只是れ一箇の九なるが故に九の母為り。過揲の数は四十八を以てして之を四分するに亦た計して四箇の十二なり。其の中に於いて三箇の十二を得るに是れ四分中の三分を得て、其の十二を三にして、其の四を九にするなり。即ち上文に三十六の数、四を以て之を約すれば、却って是れ四箇の九なり。故に九の子為り。一箇の十二も亦径一の義なり。九箇の四も亦た囲三の義なり。即ち四象の中の太陽、第一位を占めて九を含むの数なり。特に蓍を揲し爻を逐いて、各々老少の数有り其の変と不変を観て以て占を為し、太極に由りて加倍を以て生ずる者は、則ち老少なり。（『通釈』「明蓍策」）

（9）韓康伯及び孔穎達の旧注を確かめてみると、「分かちて二を為すは一営なり。一を掛けて三に象るは二営なり。之を揲うるに四を以てする三営なり。奇を扐に帰すは四営なり」（『周易正義』繫辞伝・韓注）とあり、孔穎達は「再扐して後に掛くとは、既に分かつに天を左手に於いてし、地を右手に於いてす。乃ち四四もて天の数を揲えて、最末の余りは之を帰すに掛扐の一処に合わす。是れ一扐なり」（『周易正義』繫辞伝・孔疏）とあり、掛一策を三変にわたって取るべきかどうかについて詳述していない。

（10）畢中和については、唐の劉禹錫・柳宗元と同時代の人と知られるが未詳。著述『揲蓍法』は今に伝わらない。

（11）郭雍（一〇九一～一一八七）は南宋の河南府洛陽の人、字は子和、兼山先生郭忠孝の子である。乾道年間に高官に推挙されるも応じず、沖晦処士、頤正先生の称号を賜った。父の忠孝は程子に学び、「兼山易解」を著した。父の没後、遺書は散佚し、雍は南渡後、峽州長楊山谷に隠居し、『郭氏傳家易說』を著した。雍は自ら父の易説にもとづいたというものの、実際はその多くが独自のものと評価される。朱子は、「兼山易は象数の学に溺れるも、今、雍の書を観るに大抵義理を剖析し、程伝と相似て象数に溺れる者に非ざるなり。雍の言に曰く、易の書為るや、其の道其の辞、皆象に由りて出づるも、未だ象を忘れて易を知るにあらざる者なり。首腹馬牛の類の如きは、或いは時に忘るるべきなり。此れ象の末なり。其の説、此の如く殆ど其の父意と必ずしも尽くは同じからず」と述べ、程子学の流れを汲んでいると評している（『四庫全書提要』経部易類「郭氏家伝易説」）。著述に「郭氏家伝易説十一巻」のほか、「卦辞旨要六巻」「蓍卦辨疑三巻」がある。今に伝わるのは、「郭氏家伝易説十一巻」のみである。

An introduction to the study of *Yixueqimeng* 易学啓蒙 :

with a focus on the method of using bamboo divination

Hyeon SHIN

Yixueqimeng 易学啓蒙 was completed in March 1186, 10 years after Zhuxi 朱熹 wrote *Zhouyibenyi* 周易本義. Zhuxi 朱熹 has been revising the book for more than a decade even after it was printed, and his academic enthusiasm for the book was special. Zhuxi 朱熹 describes the purpose of his writing in his preface and states that it is to present a solid theoretical basis for beginners. However, even though it is a "book of enlightenment for beginners," the content of *Yixueqimeng* 易学啓蒙 is by no means simple. In the first place, the name *qimeng* 啓蒙 was modestly named with modesty, but he thought it was rather insolent, so he told his teacher friend Caiyuanding 蔡元定 that he wanted to change it to a different name.

Yixueqimeng 易学啓蒙 consists of four chapters: *Bentushu* 本図書 chapter 1, *Yuanguahua* 原卦画 chapter 2, *Mingshice* 明蓍策 chapter 3, and *Kaobienzhan* 考変占 chapter 4. At first, He was thinking of a composition of *Yuanguahua* 原卦画 chapter 2 and *Mingshish* 明蓍策 chapter 3, but based on the theory of six, seven, eight, nine derived from *Hetuluoshu* 河図洛書, *Bentushu* 本図書 chapter 1 was added, and *Kaobienzhan* 考変占 chapter 4 was a separate edition of the *Guabientu* 卦変図 contained in *Mingshish* 明蓍策 chapter 3.

In this article, *Mingshish* 明蓍策 chapter 3 that is an explanation of the method of using bamboo divination sticks in *Dayanzhishu* 大衍之数 chapter of *Xicizhuan* 繫辞伝 is considered. The method of using bamboo divination, which is widely known today, but is a complex and intractable problem in the study of the history of interpretation and thought of it. It's not just only *Mingshice* 明蓍策 chapter 3. The fact that there is little research on *Yixueqimeng* 易学啓蒙 today illustrates the difficulty of the book. In this article, I examined the number theory of the points contained in the *Yixueqimeng* 易学啓蒙 and explored Zhuxi 朱熹's interpretation and characteristics of method.